The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『本尊聖教録』外典部所収の文献と日蓮遺文について

芹澤寛隆

一　問題の所在

『本尊聖教録』とは、中山法華経寺第三世日祐（一二九六―一三七四）が、康永三年（一三四四）に作成した、法華経寺蔵の日蓮遺文、本尊、経典、仏教書、仏具その他を記録した蔵書目録のことである。この目録の特徴としては、日蓮（一二二二―一二八二）所持のものとされる文献や仏具なども記録しているという点が挙げられる。特に『本尊聖教録』の第三四は外典の部とされ、日蓮が所覧していた可能性のある文献が記されている。

日蓮が、自らの法門を示し、弟子・信者への教化をする際に、多くの説話や故事成語、歴史的事実に関する記述を用いているということは、先行研究において既に示されている。(1) しかし、これまでの研究は日蓮引用の説話、故事成語の原典の確認作業や、説話の使われ方の確認が主であった。そのため、日蓮の知識受容について、原典以外からの受容という視点はほとんどされてこなかった。

日蓮遺文中の説話や故事成語、特に中国史や中国思想を原典とするものを見ていくと、それらは内容、出典ともに多岐にわたっており、(2) 全てを原典から得ていたとは考えにくい。日蓮所覧とされる文献が記録されている目録中において中国史、中国思想に関するものは書名が明らかなものとしては『貞観政要』と『史記』の一部があるのみである。(3)

小稿では、『本尊聖教録』の外典部に収録されている文献のうち、『和漢朗詠集』と『本朝文粋』にある説話や故事成語と、日蓮遺文との関係を示し、日蓮における両書の活用の可能性について示したい。

二　日蓮と『和漢朗詠集』

『本尊聖教録』第三四に記録される文献中に『注朗詠』上下二帖とある。(4) この書物は『和漢朗詠集』の注釈書であると考えられるが、諸本ある注釈書のうち、どの本に該当するか

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

は、『本尊聖教録』にある『注朗詠』を確認出来ないため不明である。

『和漢朗詠集』については日蓮直弟の岡宮光長寺日法（一二五八―一三四一）の写本が現存している。[5] 光長寺本は下巻のみで欠失部分も多いが、送りがなが付されており、日法が活用していたと考えられている。また日蓮遺文中にも『和漢朗詠集』所収の和歌が引用されている点からも、日蓮が『和漢朗詠集』ないしその注釈本を所持し、活用していた可能性は高いと考えられる。

三　日蓮と『本朝文粋』

『本尊聖教録』第三四に記録される文献中に『文粋』十三帖とある。[6] また、身延山には鎌倉後期のものとされる『本朝文粋』が第一巻のない、十三巻の形で現存している。[7]

この他、日蓮自筆とされる中山法華経寺蔵の『立正安国論』の紙背に記されていた『本朝文粋』がある。[8]

四　『和漢朗詠集』『本朝文粋』と日蓮遺文の対照

今回対照に用いた『和漢朗詠集』は藤原公任編　大曽根章介、堀内秀晃校注『和漢朗詠集』（新潮社、昭和五八年）、『本朝文粋』は藤原明衡編『本朝文粋』（『校注日本文学大系』第二三巻、誠文堂新光社、昭和七年）である。『和漢朗詠集』『本朝文粋』の本文は太字で示し、次に頁数を示す。さらに改行し、日蓮遺文の該当部分と遺文名、頁数を引用する。日蓮遺文は立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文　改訂増補版第二刷』（身延久遠寺、平成三年）に依る。

『和漢朗詠集』

天の原　ふりさけ見れば　春日なる　三笠の山に　いでし月かも

一〇一頁

仲丸が日本国の朝使としてもろこしにわたりてありしが、かへされずしてとしを経しかば、月の東に出たるをみて、我国みかさの山にも此月は出させ給て、故里の人も只今月に向てながむらんと、心をすましてけり。『光日房御書』一一五二頁

安部中磨呂が漢土にて日本へかへされざりし時、東よりいでし月をみて、あのかすがの（春日野）の月よとながめしも、身にあたりてこそおはすらめ。『妙心尼御前御返事』（真蹟なし）[9] 一七四七頁

幸逢堯舜無為化　得作羲皇向上人　二四六頁

世成羲農之世国為唐虞之国。『立正安国論』一二四頁

吹風枝をならさず、雨攘を不砕。代は羲農の世となりて、今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死之理顕れん時を各各御覧ぜよ。『如説修行抄』（真蹟なし）七三三頁

朝有紅顔誇世路　暮為白骨朽郊原　二九六頁

然れば外典のいやしきをしえにも、朝有紅顔誇世路夕為白骨朽郊原と云へり。『聖愚問答鈔』（真蹟なし）三五八頁

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

毛宝亀帰寒浪底　王弘使立晩花前　二九八頁
毛宝が亀はあを（襖）の恩をわすれず。『開目抄』五六一頁
白亀は毛宝が恩をほうず。畜生すらかくのごとし。『報恩抄』一一九二頁

『本朝文粋』
漢武之俗ヲ撫スル也。　初メテ建元ヲ以テ而名ト為ス。八四頁
漢土には建元を初とし、日本には大宝を初として、『報恩抄』一二三三頁

三皇誰カ首ニ在ル。　穆穆タリ宓羲ノ得。　三一三頁
世成羲農之世国為唐虞之国。『立正安国論』二二四頁
吹風枝をならさず、雨攘を不砕。代は羲農の世となりて、今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死之理顕れん時を各各御覧ぜよ。『如説修行抄』（真蹟なし）七三三頁

何トナレバ白居易ガ詩ニ云ク。幸ニ逢堯舜無為ノ日ニ逢ウテ。羲皇向上ノ人ト作ルコトヲ得タリ。
堯舜ハ二帝ノ名也。羲皇ハ一帝ノ名也。一人ノ名ヲ以テ二人ノ名ニ対スルハ先賢之跡也。三一八頁
世成羲農之世国為唐虞之国。『立正安国論』二二四頁
吹風枝をならさず、雨攘を不砕。代は羲農の世となりて、今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死之理顕れん時を各各御覧ぜよ。『如説修行抄』（真蹟なし）七三三頁

蓋五緯珠ヲ連ネ。二離璧ヲ合スルトキハ。則チ踏次頻リニ謝ス。三九八頁
観夫二離合璧五緯連珠。『立正安国論』二〇九頁

夫レ李老之玄道ヲ立ツル也。四六二頁
此等の聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり。其の所詮は三玄をいでず。三玄と者、一者有の玄、周公等此を立。二者無の玄、老子等。三者亦有亦無等、荘子が玄これなり。玄者黒也。『開目抄』五三五頁

おわりに

非常に雑駁な内容ではあるが、日蓮が様々な文献に目を通し、それらから得た知識や情報を用いて、弟子や信者への教化や布教に用いていたという可能性の一端をしめすことができたと思う。

今回参照した『本尊聖教録』所収の文献が本当に日蓮所覧の文献であったのかという問題は残るが、『本尊聖教録』に記録があることのみを根拠とするのではなく、他の事実等からも日蓮所覧の可能性をうかがい得るものとして、この両書について考察した。

この両書に記されている説話、故事成語、歴史的事実と日蓮遺文との間に見られる共通の説話として、先に挙げたものを含め、『和漢朗詠集』に一〇か所、日蓮遺文の該当個所として二一か所、『本朝文粋』に二五か所、日蓮遺文の該当個所として四九か所を確認出来た。これは、日蓮自身がその法

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

門を説く際にこの両書を用いた可能性があること、またこれらの文献が弟子・檀越らによって入手され、日蓮の教えの理解の一端を担っていた可能性があることを示していると思われる。

今後の課題を列記するならば、日蓮引用の説話・語句が弟子・檀越と共通に理解し得るほど普遍的なものであったのかという点、個々の語句の出典についての更なる可能性の検討、日蓮所持の可能性のある文献を遺文中の表現を中心に確認すること、日蓮所覧の文献とされる、『宝物集』[10]や『蒙求』等の諸文献との比較検討などが挙げられる。更なる検討を加えたい。

1　最近の例として、佐々木馨著『日蓮の思想構造』（吉川弘文館、平成一一年）、荒誉子稿「日蓮聖人の歴史叙述に関する編年的考察―中国史を中心に―」（『仏教学論集』二四号、平成一二年）、若江賢三・小林正博著『日蓮の説いた故事・説話』（第三文明社、平成一六年）等がある。

2　三好鹿雄稿「日蓮聖人所覧の外典に就いて」（『東方学報』第六冊、昭和一一年）によれば三一種、高森大乗稿「日蓮聖人の学問的環境に関する一試論」（『日蓮教学研究所紀要』第三二号、平成一七年）によれば二四種以上の文献にわたるとしている。

3　身延山第一二世日意（一四四四―一五一九）が作製した『大聖人御筆目録』、身延山第三三世日亨（一六四六―一七二一）が作製した『西土蔵宝物録』中に記録がある。

4　日祐著『本尊聖教録』日蓮宗宗学全書刊行会編『日蓮宗宗学全書』一巻四三一頁。

5　小西徹龍稿「光長寺の開創と伝来の宝物」一〇八頁（『日蓮大聖人おん伝教え光長寺』宗祖日蓮大聖人開宗七百五十年奉讃会、平成一四年）。

6　日祐前掲書　四三一頁。

7　土井洋一・中尾真樹共編『本朝文粋の研究』（勉誠出版、平成一一年）。

8　中尾堯稿「日蓮筆『立正安国論』（国宝）とその紙背『本朝文粋』巻第十三の成立と伝来をめぐる研究」（『古文書研究』二六、昭和六一年）。

9　日蓮自筆の遺文がないものについては（真蹟なし）と注記した。

10　『和漢朗詠集』と同様に、岡宮光長寺に、日春（一二三〇―一三一一）の写本があり、また日蓮もこの書物を活用している。

〈キーワード〉　日蓮、日蓮遺文、外典、説話、『和漢朗詠集』、『本朝文粋』

（東北大学大学院）

NII-Electronic Library Service